

映画史に残る、「男」の物語が誕生した。

主演・加藤雅也

監督：和泉聖治×原作：北方謙三

プロデュース：中野英雄

影に抱かれて眠れ

2019 年秋、公開決定！！初出し写真&コメント解禁！！

この度、主演に加藤雅也を迎え、講談社創業 100 周年記念出版作品で、巨匠・北方謙三原作の「抱影」（講談社文庫刊）が、遂に実写映画化された。メガホンをとったのは、10 年以上にわたり圧倒的人気を誇る国民的大ヒット作品「相棒」シリーズのメイン監督を務めた和泉聖治。哀愁漂う男たちの悲哀と優しさを書き上げた原作は、純文学を超える力強さでファンを魅了し北方謙三の真骨頂ともいえる名作。その原作の映像化にあたり和泉聖治監督は、原作をも超えてしまうほどのスタイリッシュな映像で果敢に攻め、重厚感溢れる映像を完成させた。そして、本作をプロデュースしたのが劇男一世風靡を経て、個性派として活躍する俳優・中野英雄。本作が初プロデュース作品となる。更に脚本は、硬派な役どころで俳優として活躍し、監督やプロデューサーとしても活躍する小沢和義が手掛けた。俳優陣には加藤雅也はじめ、ベテランから個性派までの豪華キャストが集結し、まさに映画史に残る「ザ・男」の物語を誕生させた。



物語の主人公は、こよなく酒を愛し、横浜の野毛の街を愛する抽象画家・裕冬樹。裕は、横浜・野毛の街で2軒の酒場を営む。絵を描き、野毛の街で酒を呑み、自らの経営する店を巡回するのが裕の日常だった。そんな平凡な毎日を揺るがす事件が起こる。裕を父親の様に慕う岩井信治が傷を負い、冬樹のもとを訪れた。この事件によって、やがて冬樹は横浜の街の闇に呑み込まれていくことになる。一方、独身を貫く冬樹には、欲望のはけ口として勝手気ままに関係を続ける女性と、純愛を貫き続ける女性の存在があった。男社会の抗争に呑み込まれようとする中、10年以上純愛を貫く女性の余命を知ってしまう冬樹。冬樹の周囲がひとときわ騒めきだし、平凡な日常が大きく崩れ始めていく。

主人公・裕冬樹を演じるのは、「真田十勇士」（16）「二階堂家物語」（19）など、出演作で演技の幅を見せつける大人の色香漂うベテラン、**加藤雅也**。本作では、全てを受け入れていく「男」の哀愁と優しさを見事に演じきっている。冬樹が純愛を貫く女性・永井響子には「パッチギ! LOVE&PEACE」（07）「愛唄 -約束のナクヒト-」（19）などで知られる**中村ゆり**。冬樹を兄貴のように慕い冬樹が経営するクラブのバーテンダー辻村正人を演じるのは、俳優としても活躍する EXILE の**松本利夫**。冬樹を事件に巻き込む発端を作る岩井信治を演じるのは、「ケンとカズ」（15）で卓越した演技力が評価された**カトウシンスケ**。そして、男たちの抗争で横浜のヤクザを演じたのは、湘南乃風のメンバーでミュージシャンの**若旦那**。本作で本格的な映画出演を果たし、俳優としても活躍。出演作の「JK★ROCK」（東宝配給作）が4月に公開を控えている。同じく横浜のヤクザ役に、ヒップホップ界で熱烈なファン層を獲得しているアーティストの**AK-69**。本作が俳優としてのデビュー作となり、映画初出演となる。そして、冬樹と関係を持つクラブのママに**熊切あさ美**、冬樹の才能にほれ込む画商に**余貴美子**、冬樹に刺青を教える彫師に**火野正平**と、豪華な俳優陣が集結した。

<主演・加藤雅也 コメント>

原作の“抱影”は、余計な説明のない漠然とした世界観が頭に入ってくる小説でした。

俳優としてセリフで演じるのではなく、作品の世界観を雰囲気でも表現する演技とは？と考えを巡らせていた時だったので、是非挑戦したいと思った作品でした。北方さんからは“締念”という言葉頂き、その言葉をもとに主人公（裕冬樹）を作っていました。ハードボイルドというよりはノワールな作品。

この作品の世界観と一人の男の生き様を楽しんで頂けたら嬉しいです。

<監督・和泉聖治 コメント>

2018年の真夏。

北方謙三原作「抱影」の撮影は始まりました。北方謙三さんは、ダンディーで私の尊敬する作家です。

プロデューサーの中野英雄氏と小澤和義氏とは撮影に入る前も、撮影に入ってから毎日のように作品について熱く討論を重ねました。両氏は私の古くからの知人であり、映画仲間でもあります。

そんな“我らが仲間”たちと、うだるような連日の猛暑の中で撮り終えた暑い熱い映画「影に抱かれて眠れ」が完成しました。今はさまざまな想いが去来します。この作品に携わった多くの人たちに感謝します。

ありがとう・・・。

<原作：北方謙三 コメント>

原作は、映画の素材のひとつである。同時に、本質の部分で深く繋がり合っている。和泉聖治監督が、そこをどう扱うのか、私は注視していた。映画人の創造力の中で、原作はまた、新しい命を持った。それは驚愕すべき出来事であり、映画の力と可能性を、私に改めて感じさせた。加藤雅也の、自然体とも呼ぶべきたずまいは、演技の本質とはなにかを、私に考えさせた。てらいのない存在感が漂い出して、間違いなく新しい境地に立ったことを感じさせた。影に抱かれた男の、激しさと哀しみ。人はなぜ生きるのかという命題にさえ、ある答えを出したと思う。

<プロデューサー：中野英雄 コメント>

今回の映画は初プロデュース作品になります 北方謙三先生の作品を先生と同年代の和泉聖治監督に撮って頂きたく交渉致しました。若い頃に観ていた和泉聖治監督の作品のテイストを盛り込んで頂き 懐かしくもあり、また新鮮な映画になっていると思っております。

【物語】 裕（はざま）冬樹（加藤雅也）は、横浜でいくつかの酒場を経営する画家。毎晩のように自転車で店を巡回し、したたかに飲む。一方、画家としての才能は内外に名を知られる存在でもあった。そんな冬樹の平凡な日常が狂い始める。ある日、冬樹を兄貴と慕う岩井信治（カトウシンスケ）が傷を負って冬樹のもとに転がり込んできた。信治は、冬樹の店を辞めた後NPOの慈善団体、“碧（みどり）の会”の一員となって、横浜の街の闇に飲み込まれた女の子たちを救い出す活動をしていた。一人の未成年の女子を救うために窮地に追い込まれていた信治に冬樹は手を貸してしまう。そんな冬樹を守ろうとする店のバーテンダー辻村（松本利夫）。男たちの抗争に巻き込まれようとする中、冬樹は純愛を貫く人妻・永井響子（中村ゆり）の余命を知らされ、響子への愛を絵に描き写したいという思いが込み上げる。仲間を守るため、愛を貫くため、冬樹が下した決断とは――。冬樹の周辺の人間模様が複雑に交差するなか、果たして冬樹の人生はどんな終着点を迎えるのか・・・。

出演：加藤雅也／中村ゆり、松本利夫、カトウシンスケ、熊切あさ美、若旦那／余貴美子、火野正平／AK-69

原作：北方謙三『抱影』（講談社文庫刊）

監督：和泉聖治 脚本：小澤和義 プロデューサー：中野英雄 製作 BUGSY、ドリームエンタテインメント

配給 BS-TBS 配給協力：トリプルアップ ©BUGSY 公式サイト：kagedaka.jp

2019年秋、全国公開

<パブリシティお問い合わせ：紙・電波・WEB>

MUSA（電波・紙・WEB）：03-6262-8166（田中 090-2440-8886／甘楽 080-3429-7820／篠 090-1769-9488）

<配給お問合せ>

BS-TBS メディア事業局 担当 清水（TEL. 03-5575-2250／FAX. 03-5575-2251）

トリプルアップ 担当 島崎（TEL. 03-3505-0453／FAX. 03-6234-4322）